イブン・アイニーの生涯

――武人か文人か？――

中　町　信　孝

はじめに

今日，エジプトの首都カイロを訪れる者で，「カスル・アイニー通り（El-Kasr el-Ainy street, shāri‘ qaṣr al-‘Aynī）」という通りを目にしない者はないだろう。ナイル川の東岸，カイロ市街の中心にあるタハリール広場から南に延びる大通りであり，その沿線にある，エジプト初の近代病院である「カスル・アイニー病院」も有名である。しかし，現地の人々の間でも，この「アイニーの宮殿」を意味する地名が何に由来しているのかを知る者は少ない。

1979年，カスル・アイニー病院の修復作業の際に，敷地内の遺構を調査した当時のカイロ大学文学部考古学科のハサン・バーシャー教授は，その詳細な報告書において，この地がマムルーク朝末期の有力者であるイブン・アイニーなる人物の邸宅の跡地であることを記述している[1]。そのことは他の地誌史料や，同時代に記された年代記史料などからも裏付けられることである[2]。それではこのイブン・アイニーとは何者なのであろうか。

同時代史料の伝えるイブン・アイニーとは，本名をShihāb al-Dīn Aḥmad b. ‘Abd al-Raḥīm b. Maḥmūd al-‘Aynī といい，有名な歴史家でハナフィー派大カーディー職を務めた知識人，バドルッディーン・マフムード・アイニー Badr al-Dīn Maḥmūd al-‘Aynī の孫であることが知られる[3]。またイブン・アイニーの経歴を見るならば，スルターンのフシュカダム（al-Ẓāhir Khushqadam）の治世（865/1461-872/1467）に取り立てられ，武官としての最高位に当たる千人隊長（muqaddam al-alf）の位に達したことが分かる。

高名な文人の孫としての生い立ちと，武官の最高位に上り詰めた経歴とは，一般的なマムルーク朝の統治体制・社会システムのあり方からすると，奇妙な取り合わせである。マムルーク朝では，主に奴隷身分として中央ユーラシアからもたらされた「マムルーク」と呼ばれる軍人たちが，排他的な支配エリート層を形成していたからである。当時の支配エリート層には，マムルークの子ども世代といえども参入することは難しかったことはよく知られている。一方，現地出身の非軍事集団の人物は，諸学を修めたウラマーとしてカーディーや官僚職などに就くことはあっても，軍事的な役職に就くことなどはまずあり得ないことであった[4]。

本稿ではこのイブン・アイニーの経歴に焦点を絞り，彼がいかなる理由から高位の武官としての出世を遂げたかを分析し，彼の出世が意味するものは何であるかを検討したい。

1．イブン・アイニーの栄達と没落

まずはイブン・アイニーがその生涯において，どのように出世し，その後どのように没落していったかについて概観しておこう。イブン・アイニーの事績をまとめて伝える史料としては，サハーウィーの伝記集がもっとも重要であるが[5]，その他，アブドゥルバースィト・ハナフィーやイブン・イヤースの年代記にも多くの記述がある。

サハーウィーによれば，イブン・アイニーは850/1446-1447年生まれとあり，祖父であるマフムードがなくなる5年前に生まれたことになる。父親のアブドゥッラヒーム（Zayn al-Din ‘Abd al-Raḥīm b. Maḥmūd al-‘Aynī）はアフバース監督官という政府の役職に就いており，安定した地位と収入が見込まれたはずであるが，「（イブン・アイニーは）父親の存命中からアミール・フシュカダムの家で育てられた。というのは彼は，フシュカダムの義理の娘の息子（ibn rabībati-hi）であったからである」という[6]。そしてこのフシュカダムがスルターンの位に就いたことにより，イブン・アイニーの特異な出世の道が開けるのである。

865/1461年，15歳になったイブン・アイニーは，スルターンとなったフシュカダムから武官としての第一歩である十騎長の位を与えられた。そして868/1464年，18歳にして巡礼のアミール（amīr al-ḥājj）に任命され，スルターンの后でありフワンド・クブ

ラー（Khuwānd Kubrá）とも呼ばれるシュクルバーイ Shukrbāy の巡礼に同行した[7]。フシュカダムの短い治世において，イブン・アイニーは出世を重ね，869/1465年には先述の通り武官の最高位である千人隊長の位に[8]，871/1466年には厩舎長官（amīr ākhūr）の職に任じられた[9]。彼が「カスル・アイニー」として知られる邸宅をナイル川沿いの Manshiyyat al-Mahrānī に建設したのも，フシュカダムの治世であった。この邸宅にはフシュカダムが，城塞からカラーファの墓地群に詣でる際にしばしば立ち寄っていたとの記述がある[10]。また，時期は不詳だがカイロ北郊のスィルヤークースの修道場（Khānqāh Sīryāqūs）の監督官にも任じられている[11]。

872/1467年，フシュカダムが落馬がもとで危篤状態となると，イブン・アイニーを含む４名のアミールたちにより次のスルターンを選ぶための「会議」が開かれた。その構成員は，先のスルターンであるムアイヤド・シャイフ al-Mu'ayyad Shaykh（815/1412-824/1421）の子飼いマムルーク軍団ムアイヤディーヤ（al-Mu'ayyadiyyah）を代表するヤルバーイ・ムアイヤディー Yalbāy al-Mu'ayyadī，同じく前スルターン，ザーヒル・ジャクマクal-Ẓāhir Jaqmaq（842/1438-857/1453）の子飼いマムルーク軍団ザーヒリーヤ（al-Ẓāhiriyyah）を代表するタムルブガー・ザーヒリー Tamurbughā al-Ẓāhirī，そして現スルターンであるフシュカダムの子飼いマムルーク軍団フシュカダミーヤ（al-Khushqadamiyyah）からはハイルバク Khayrbak とイブン・アイニーの２名であった【図１】。フシュカダミーヤのうち半数は次期スルターンとして，イブン・アイニーを推戴しようとした[12]。フシュカダムが没すると，元スルターンの子飼いであるヤルバーイ，タムルブガーが相次いでスルターン位に就くが，いずれも１年に満たないきわめて短い治世に過ぎず，イブン・アイニーはその間アミール・マジュリス（amīr majlis）として，ハイルバクとともに政局のキャスティングボートを握る要職にあり続けたのであった[13]。

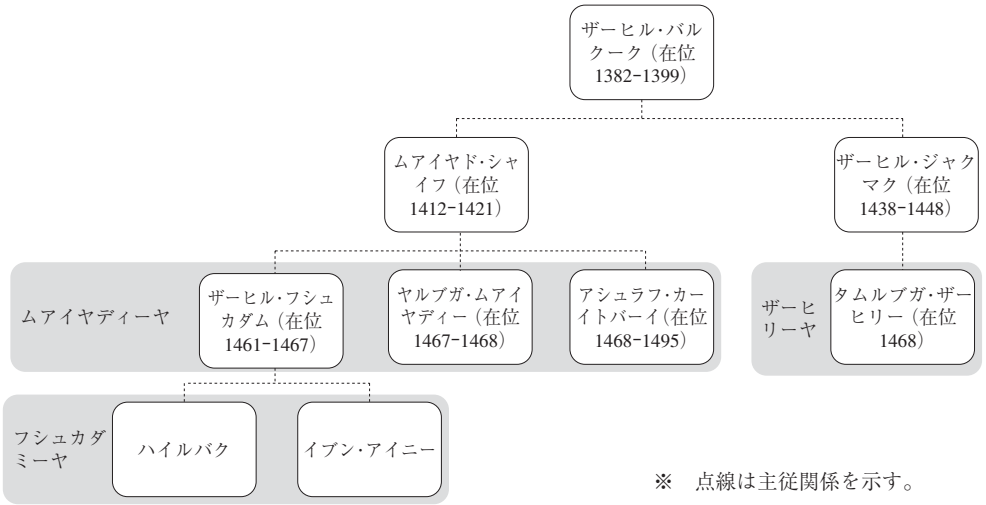
しかし，ムアイヤディーヤの中からカーイトバーイ al-Ashraf Qāytbāy が頭角を現して872/1468年にスルターン位に就くと，イブン・アイニーは逮捕されて地位を追われることになった。彼は城塞内の牢獄に囚われ，その莫大な財産は没収された[14]。カーイトバーイ期のスルターン財政を分析したC.ピートリーは，イブン・アイニーからの没収財産こそがカーイトバーイの財政改革の大きな資金源となったと分析している[15]。その後イブン・アイニーは釈放されたものの，政治的地位を回復することなく過ごし，908/1503年にメッカおよびメディナへの巡礼中に亡くなった[16]。

２．父系親族

上で見たようなイブン・アイニーの短期間での出世には，どのような背景があったのであろうか。彼がエジプト生まれであるにもかかわらず「アインターブ生まれ」を意味する「イブン・アイニー」というニスバで知られていることは，彼が当時の社会においてその父方の祖先との関係において広く認知されていたことをうかがわせる。それゆえまずは，彼が有する父系祖先のつながりに，彼の出世の理由を探るべきであろう。

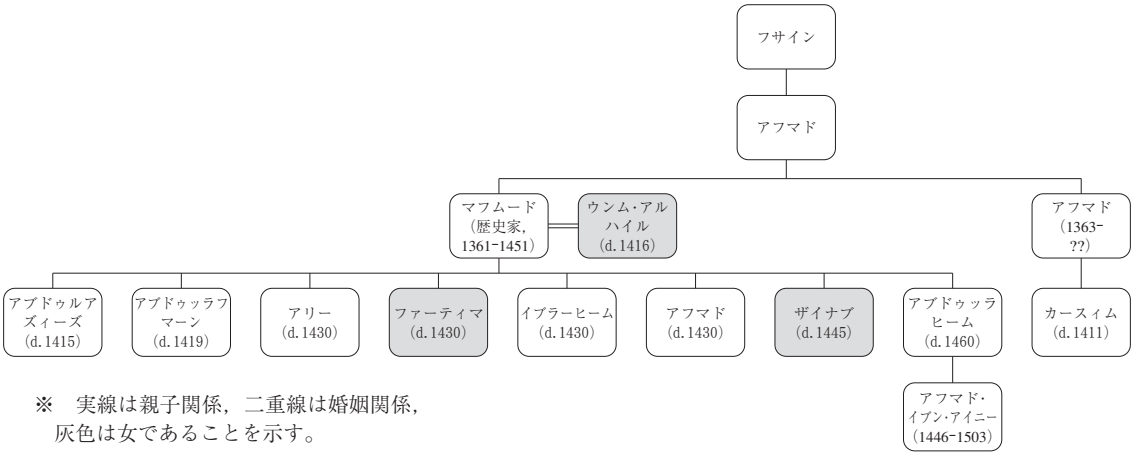
彼の祖父マフムード・アイニーは，イブン・アイニーが生まれた５年後に亡くなっていることについてはすでに述べた。また，マフムード・アイニーの子どもたち，つまりイブン・アイニーの叔父，叔母たちについ

【図１】　フシュカダム死亡後のアミール関係



※　点線は主従関係を示す。

【図２】 イブン・アイニーの男系親族



※　実線は親子関係，二重線は婚姻関係，
灰色は女であることを示す。

【表１　アイニー生存中に死亡したことが確認できるアイニーの子どもたち】

818年１月14日/1415年３月26日	息子アブドゥルアズィーズ
822年４月４日/1419年４月30日	息子アブドゥッラフマーン
833年６月15日/1430年３月11日	息子アリー
833年７月５日/1430年３月30日	娘ファーティマ
833年７月６日/1430年３月31日	息子イブラーヒーム，息子アフマド
849年２月24日/1445年６月１日	娘ザイナブ

ては，マフムードの著した年代記『真珠の首飾り』に記された自伝的記述などから死亡年が分かるケースがある。【表１】にそれを一覧にした[17]。また【図２】はイブン・アイニーの父系親族をまとめた系図である。

このように，祖父マフムードの子どもたちのうち，男５人，女２人が，イブン・アイニーの誕生前に亡くなっていることが分かる。一方，イブン・アイニーの誕生時に生存が確認できる父系親族は，祖父マフムードと父アブドゥッラヒームのみである。マフムードが単身カイロに上京して築いたアイニー家だが，その相続人と呼びうるのは，アブドゥッラヒームとその息子イブン・アイニーの家系に限られていたとみてよいだろう[18]。

それでは，イブン・アイニーはこのアイニー家からいかなる遺産を引き継いでいたのだろうか。まず注目すべきは，祖父マフムードの建造したバドリーヤ学院であろう[19]。この時代，学院やモスクなどの公共財は私有財産としてではなく，イスラームの寄進制度であるワクフの受益対象として運営されており，設立者とその家族はワクフ財の監督官として収益や利権を維持することが広く行われていた[20]。バドリーヤ学院のワクフ条件を記した文書等は現存しないため定かではないが，イブン・アイニーもまた，この学院のワクフ監督の地位を引き継いで，何らかの利益を引き出していた可能性がある。しかし，サハーウィーやイブン・タグリービルディーの伝記集は，祖父のマフムードがその晩年に「持ち物や蔵書の一部を売り払う」ほどの困窮状態にあったことを伝えている[21]。つまり，マフムードが生前に築いた富は，イブン・アイニーの生まれた時点にはほとんど利益を生み出していなかったと考えられる。

むしろ，イブン・アイニーがバドリーヤ学院を対象とする新たなワクフ設定を行ったことを伝える記述が残されている。870/1466年，彼はバドリーヤ学院に対して数多くのワクフを設定するとともに，スルターンのフシュカダムに対し，何人かのウラマーを学院における教授職に任命するよう求めたという[22]。ここから当時，イブン・アイニーにとってのバドリーヤ学院は収入源と言うよりは，その運営のために私財を投じる対象だったことが見て取れるが，いずれにせよ彼が学院の運営に関する大きな裁量権を有していたことは確かであろう。一連のワクフ行為によって彼は，教授人事を含む学院運営の再整備を行ったが，このことは彼にとって，経済的な見返りというよりは，彼の社会的権威を高めたり，教授に任命した知識人たちとの良好な関係を維持したりすることに役立ったと考えられる。

もう一つ，祖父マフムードが残した制度的な遺産と

しては，彼が生前に就いていた様々な役職がある。マフムードが就いた役職のうちアフバース監督官職は，その死後しばらくしてから父のアブドゥッラヒームに受け継がれた[23]。このことはアイニー家に莫大な現金収入をもたらしたと考えられるが，アブドゥッラヒームの没後，イブン・アイニーがこの職に就いたことを伝える証拠はなく，役職の継承は２代限りだったものと思われる。

このように，バドリーヤ学院やアフバース監督官職などは，マフムード没後もアイニー家に受け継がれていたものの，イブン・アイニーにとって経済的な恩恵をもたらしたとは言えないことが分かった。それでは，彼がウラマー家系の一員として享受した文化的な遺産としてはどのようなものがあったであろうか。

この時代の文人たちはしばしば，身近な男性の親族から読み書きの手ほどきやハディース学，法学の基礎を習い，その後本格的なイスラーム教育の道に進むことが知られている[24]。イブン・アイニー出生時には，ひと世代上の男性親族の多くがすでに亡くなっており，また高名な学者であった祖父マフムードも彼が５歳の時に亡くなっている。一般に当時の文人たちの学び始めの年齢は５歳であったため，イブン・アイニーが祖父から読み書きなどを学ぶ機会はほとんどなかったと考えられる[25]。

そうすると父アブドゥッラヒームが，彼に読み書きを教えられる唯一の親族であったとみられるが，先述の通り，イブン・アイニーは早い時期からマムルーク・アミールのフシュカダムの家で育てられており，その父親との接触も限定的なものであった可能性がある。つまり，イブン・アイニーはウラマーの子として生まれながら，ウラマーとしての文化環境とは異質な社会で育っていたと考えられるのである。

その後，イブン・アイニーがウラマーの子息として何らかの知的伝達に関わったという情報は史料中に確認できない。確かに，サハーウィーによる伝記は，イブン・アイニーが３ヶ月間のハディース朗唱の集い（majlis）を開いたことや，祖父の学院において授業やタサウウフ（スーフィズム）を運営したことを伝えているが[26]，自らがハディースの伝達やその他の知識の授受を行った訳ではない。上に見たとおり，彼はバドリーヤ学院へのワクフ再設定の際に，数名のウラマーを教授職に斡旋していたが，自らが知識の教授に関わることはなかったのである。

このように，イブン・アイニーにとって父系親族との関係は，バドリーヤ学院の管理権に伴う象徴的な側面を除いては，彼の出世を左右したと考える材料は極めて乏しいと言える。それでは，母系親族との関わりは彼にどのような影響を及ぼしていただろうか。

３．母系親族

前述の通り，イブン・アイニーはスルターン・フシュカダムの「義理の娘の息子」としてその寵愛を受けていた。フシュカダムにとっての「義理の娘」であるイブン・アイニーの母親とは一体どのような人物だったのであろうか。以下に詳しく見てみよう。なお，本節で扱うイブン･アイニーの母系親族については，【図３】にまとめた。

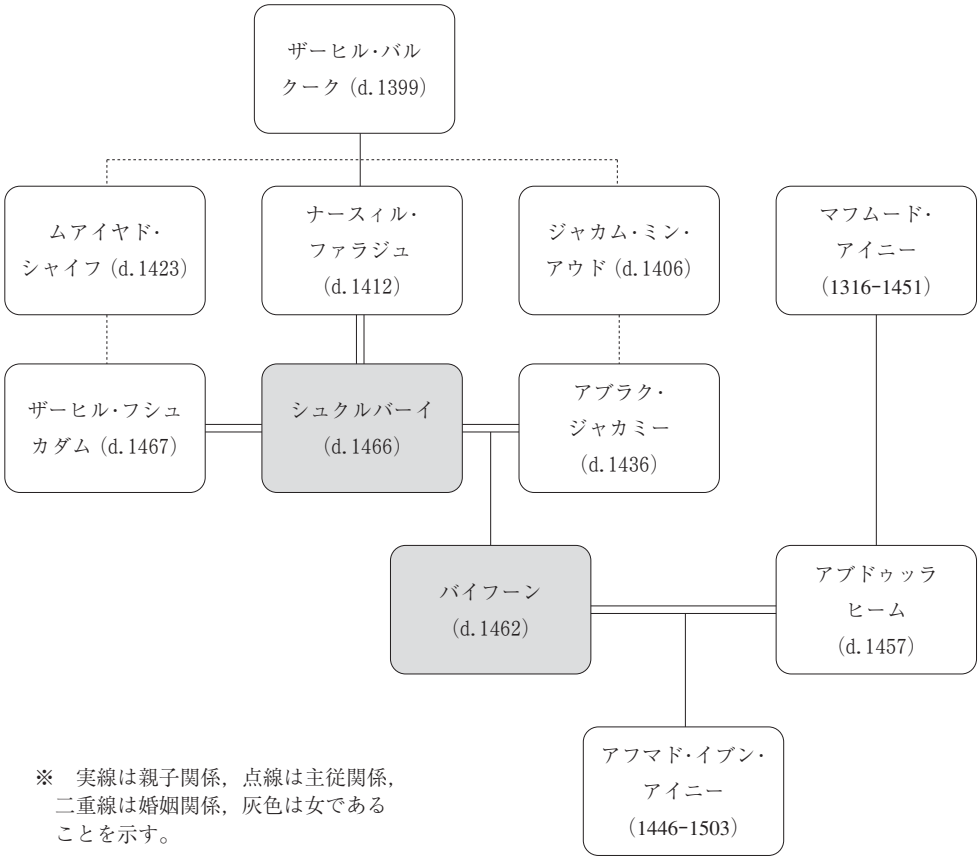
イブン・タグリービルディーの伝記集が伝えるところによると，イブン・アイニーの実母にしてアブドゥッラヒーム・アイニーの妻は，その名をバイフーン Baykhūn bt. Abrak al-Jakamī といい，ダマスカスで四十騎長アミールの位にあったアブラク・ジャカミー Abrak al-Jakamī の娘であった[27]。アブラク・ジャカミーはそのニスバが示すように，その出自はアミール・ジャカム Jakam min ‘Awd の子飼いマムルークであった。つまり，イブン・アイニーは母方をたどればマムルーク出身者を祖父とするということになる。

歴史家アイニーにとってジャカムがもっとも重要なパトロンであったことについてはすでに知られている[28]。アイニーが801/1399年に市場監督官（ムフタスィブ）職に就く際にはこのジャカムが斡旋しており，スルターン・バルクーク没後の短期間に数次にわたって同職やアフバース監督職に就任したアイニーには，当時有力アミールとなったジャカムの庇護があったと考えられる。その後ジャカムはアレッポでスルターン位を僭称し，バルクークの息子であるスルターン・ファラジュ al-Nāṣir Faraj b. Barqūq（801/1399-815/1412）に対して反乱を起こすが敗死した。アイニーはこの事件に関して，自著においてジャカムへの親愛の情に満ちた死亡記事を書いているのである。また，歴史家アイニーの弟であるアフマド・アイニー（イブン・アイニーとは別人）も，ジャカムとの間の交友関係を書き残している[29]。

このような歴史家アイニーとジャカムとの関係の深さを鑑みれば，前者の息子と，後者のイエの構成員である子飼いマムルークの娘との結婚には，アイニー家とジャカムのイエ集団との結びつきの強さが表れていると言っても良いだろう。

それでは，イブン・アイニーの母親バイフーンと，

【図３】　イブン・アイニーの母系親族



スルターン・フシュカダムとはどのようにつながるだろうか。それは，バイフーンの母親にしてイブン・アイニーの祖母に当たる人物が，先に見たフシュカダムの妻シュクルバーイであったということに注目せねばならない。彼女の伝記を伝えるサハーウィーによると，シュクルバーイは元々スルターン・ファラジュの後宮にいる女奴隷であったが，その後，前述のアブラク・ジャカミーと結婚し，バイフーンを含む２児を設けた。840/1435-36年にアブラクが亡くなると，後のスルターンとなるアミール・フシュカダムと再婚した[30]。フシュカダムはスルターン・ジャクマク治世，すなわち842/1438-857/1453年にダマスカスの百騎長の位に就いていたので，おそらくはダマスカス赴任中にシュクルバーイと結婚したのであろう。

サハーウィーの伝記集によれば，シュクルバーイは870/1464-65年におよそ80歳で亡くなったという。それゆえ彼女の生年は790/1388年頃となり，フシュカダムとの再婚の頃にはおよそ52歳から67歳（西暦では50歳から65歳）であったことになる。一方フシュカダムは，872/1467年に死亡した時には65歳であったので，生年は807/1404-05年，彼女と再婚したのは35歳から50歳（西暦では34歳から49歳）のアミールであったとみられる。このような，一見不釣り合いとも見える年齢での両者の再婚には，どのような理由が考えられるだろうか。

マムルーク朝時代の女性史に関する先駆的研究で知られるアブドゥッラーズィクは，当時の支配エリート層の女性は夫と死に別れた後も，再婚することによって自らの社会的・経済的な立場の弱さを克服したと述べている[31]。ここには寡婦と再婚してその面倒を見ることがムスリム男性にとっての善行であると見なす，イスラーム的倫理観が反映されていることは言うまでもない。

また，後期マムルーク朝時代のスルターンの婚姻政策を分析したドゥルスターとファン・ステンベルヘンの共同研究は，Ｐ.ブルデューの理論を援用し，結婚を通じて獲得される社会的リソースを，①経済資本，②文化資本，③社会資本，④象徴資本の４つに分類している[32]。彼らにならって，フシュカダムがシュクルバーイと結婚することで何が得られたのかを考えてみよう。

まず考えられるのは，①経済資本である。シュクルバーイは前夫であるアブラク・ジャカミーから，シリア地方における土地や不動産などの資産を受け継いで

いたと考えられる。彼女が具体的にどれだけの資産を保有していたのかを示す史料はないが，フシュカダムにとってこの再婚は，彼女の財産を獲得する機会として機能していた可能性があろう。

そしてもう一つは④象徴資本である。シュクルバーイのかつての主人はチェルケス・マムルーク朝の開祖バルクークの息子，ファラジュであり，一方フシュカダムはスルターン・シャイフの子飼いマムルーク，ムアイヤディーヤ軍団の出身である。シャイフの主人はバルクークであるため，つまりフシュカダムにとってシュクルバーイは，主人の主人の息子の妾であったことになる。フシュカダムは彼女との再婚で高い威信を獲得し，それによりその後スルターンの位に就くことが容易となったのではないだろうか[33]。

サハーウィーが記す伝記記事によれば，自分より年長の妻シュクルバーイと結婚したフシュカダムは，彼女を慈しみ，彼女以外の妻を娶らなかったという[34]。フシュカダムが最も敬愛する妻の孫にあたるイブン・アイニーを自らの邸で養育し，スルターン即位後には城塞において彼を引き取って育てたことも，フシュカダムの妻への態度に基づく行為として理解できよう。そしてこのことが，イブン・アイニーのその後の出世に繋がったのである。

４．イブン・アイニーとは何者か

イブン・アイニーの親族関係を検討したところ，彼の特異な出世の要因は父系親族ではなくむしろ母系親族との関係にあることが分かった。マムルーク朝末期の政治史を分析したピートリーは，イブン・アイニーの出世と没落をとらえて，「（イブン・）アイニーの運命は，軍事的パトロンと文人クライアントとの共生関係における，固有の緊張関係を繰り返すものであった」[35] と述べ，イブン・アイニーを文人を代表する者とみなしている。しかし，イブン・アイニーは果たして文人であったのだろうか。

知識の側面から見るならば，イブン・アイニーは彼の父系親族が有していた文化資本を，ウラマー的知の領域においても，官僚的知の領域においても，ほとんど引き継いでいない[36]。祖父である歴史家マフムード・アイニーが，カイロのハナフィー派大カーディーを務めるほどの大学者であったにもかかわらず，イブン・アイニーは学術的集まりに自ら加わることはなかった。また父親のアブドゥッラヒームはアフバース監督官という官職をその父から受け継いでいたが，これもイブン・アイニーには受け継がれていない。

実際にイブン・アイニーが就いた役職として，スィルヤークース修道場の監督官があるが，これを文人官僚の就くべき職と見なすことは出来ない。この修道場を創建した前期マムルーク朝時代のスルターン，ナースィル・ムハンマドによるワクフ文書には，スルターンの没後にこのワクフ物件を管理するのは副スルターン（nāʾib al-salṭanah）であるとの指定がある[37]。五十嵐大介によるマムルーク朝時代のワクフ制度に関する包括的研究によれば，こうした職は文人官僚のための職ではなく，むしろ軍事エリートに対して割り当てられた，官職付属の利権と呼びうるものであった[38]。つまり，イブン・アイニーのついた役職は，厩舎長官やアミール・マジュリスを含め，いずれも武官としての職と言えるのである。

このことは，彼の育った文化的な背景とも対応している。上で見たとおり彼は，幼い頃からフシュカダムの家で育ったため，彼の父系親族が属していた知的エリート層によるアラビア語で読み書きする世界とは隔絶して暮らしていたと考えられる。それに対し，イブン・アイニーの母親バイフーンは奴隷第二世代ではあったが，その両親であるアブラクとシュクルバーイがどちらも奴隷（マムルーク）の第一世代であったため，バイフーン自身もその両親ともどもテュルク語かチェルケス語のいずれかを日常語としていたであろう。さらにイブン・アイニーが引き取られた先である，義理の祖父フシュカダムもまた奴隷第一世代であり，アラビア語は不得手であったはずである。

このように，イブン・アイニーの幼少期の言語・文化的環境は，彼が非アラビア語の文化に囲まれていたことを示している。彼がアラビア語を話すことが出来たとしても，それは決して彼の母語とは言えないものであった可能性が高い。むしろ彼は，マムルークたち軍事エリートの共通語であるテュルク語，チェルケス語により親しんでいたのである。

このように考えると，イブン・アイニーはウラマーや官僚など知識エリート層に属するのではなく，マムルークなど軍事エリート層に属する者と見なすべきではないだろうか。ここで再び，スルターン・フシュカダム没後の政治的混乱期における，イブン・アイニーの身の処し方について詳しく見てみよう。フシュカダム子飼いのマムルーク軍団フシュカダミーヤは，二人の元スルターン子飼いの軍団であるムアイヤディーヤ，ザーヒリーヤに対抗して，自分たちの代表者としてイブン・アイニーとハイルバクの二人をスルターン候補

として立てた。このうちハイルバクは，マムルーク同僚の第一人者としての資格であったが，イブン・アイニーは主人フシュカダムの実子に準じる後継者としての資格であったと考えられる。

実際にイブン・アイニーは，スルターンの息子として社会的に認知されていた。たとえば867年11月／1463年7－8月に行われたナイル川満水祭礼の際には，イブン・アイニーが「スルターンの息子として（ka-awlād al-salāṭīn）」祭礼を執り行っている[39]。また，イブン・イヤース年代記ではイブン・アイニーのことを，スルターンの実子に対して付される称号「マカッル al-Maqarr」で呼んでいる箇所がある[40]。これらの場合，イブン・アイニーは，フシュカダムの義理の孫であることが重視されたのであり，実の祖父である歴史家アイニーのウラマーとしての名声などは関わる余地はない。幼少期からアミールの屋敷で，ついで城塞内で育ったイブン・アイニーは，スルターンの王子として周囲から認知されていたのである。

かつてU.ハールマンは，マムルーク朝の領内で生まれ育ったマムルークの第二世代「アウラード・アンナース（awlād al-nās）」を，「言葉はアラブ，出自はトルコ（Arabic in speech, Turkish in linage）」と表現し，彼らの社会的・経済的な地位の高さ，および文化的な貢献を看過すべきではないと指摘した[41]。本稿で扱ったイブン・アイニーの事例は，このようなアウラード・アンナースに通じるところはあるものの，「言葉はトルコ，出自はアラブ（Turkish in speech, Arabic in linage）」という，正反対の特質を有しているように見える。ここには，従来見落とされがちであった，結婚による支配エリート間の威信の継承や，女性親族による財の分配など，マムルーク朝時代の女性史研究の発展を促す契機となりうるさまざまな現象が含まれているのである。

注

1）Ḥasan al-Bāshā, "Qaṣr al-ʻAynī al-qadīm," *Mawsūʻat al-ʻimārah wa-al-āthār wa-al-funūn al-Islāmīyah,* Cairo, 1999, vol. 1, pp. 389-532.

2）ʻAlī Mubārak, *al-Khiṭaṭ al-tawfīqiyyah al-jadīdah li-Miṣr wa-al-Qāhirah,* Būlāq, 1886-88, 6: 56; ʻAbd al-Ḥamīd Bīk Nāfiʻ b.Khalīl Afandī, *Dhayl Khiṭaṭ al-Maqrīzī.* Cairo, 2006, 85-86.

3）バドルッディーン・アイニーについては拙稿「バドルッディーン・アイニーの学問的キャリア：マムルーク朝ウラマーの一事例」『甲南大学文学部紀要』159（2009），pp. 51-71（以下，「学問的キャリア」と略），および，同「バドルッディーン・アイニーの職業的キャリア：マムルーク朝ウラマーの一事例（2）」『甲南大学文学部紀要』164（2014），pp. 237-248（以下，「職業的キャリア」と略）を参照。

4）マムルーク朝時代のマムルーク体制については，佐藤次高『マムルーク：異教の世界から来たイスラムの支配者たち』東京大学出版会，1991，pp. 144-156を参照。

5）Al-Sakhāwī, *al-Ḍawʼ al-lāmiʻ li-ahl al-qarn al-tāsiʻ*, Beirut, 1992, 1: 345-346.

6）Al-Sakhāwī, *al-Ḍawʼ al-lāmiʻ*, 1: 345.

7）Al-Sakhāwī, *al-Ḍawʼ al-lāmiʻ*, 1: 345; ʻAbd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī, *Nayl al-amal fī dhayl al-duwal,* Ṣaydā & Beirut, 2002, 6: 181, 192; Ibn Iyās, *Badāʼiʻ al-zuhūr fī waqāʼiʻ al-duhūr,* Cairo, 1984, 2: 421.

8）Al-Ḥanafī, *Nayl al-amal*, 6: 214; Ibn Iyās, *Badāʼiʻ al-zuhūr*, 2: 429-430.

9）Al-Sakhāwī, *al-Ḍawʻ al-lāmiʻ*, 1: 345; Ibn Iyās, *Badāʼiʻ al-zuhūr,* 2: 445.

10）Al-Ḥanafī, *Nayl al-amal,* 6: 210-211, 264-265; Ibn Iyās, *Badāʼiʻ al-zuhūr,* 2: 449.

11）Al-Ḥanafī, *Nayl al-amal,* 6: 303.

12）Ibn Iyās, *Badāʼiʻ al-zuhūr*, 2: 452-455, 458-459.

13）Al-Ḥanafī, *Nayl al-amal*, 6: 298; Ibn Iyās, *Badāʼiʻ al-zuhūr,* 2: 469.

14）Al-Ḥanafī, *Nayl al-amal,* 6: 310, 316; Ibn Iyās, *Badāʼiʻ al-zuhūr,* 2: 474, 3: 9-10, 27.

15）Carl Petry, *Protectors or praetorians?: The last Mamluk Sultans and Egyptian waning as a great power,* New York: State University of New York Press, 1994, pp. 168-169.

16）Ibn Iyās, *Badāʼiʻ al-zuhūr,* 4: 57-58.

17）彼らはいずれも飢饉や疫病のために亡くなったと記されている。Badr al-Dīn Maḥmūd al-ʻAynī, *ʻIqd al-Jumān,* ʻAbd al-Rāziq al-Ṭanṭāwī al-Qarmut ed., Cairo, 1: 254, 368, 2: 397, 649. なお，マフムードの妻ウンム・アル・ハイルも，819年3月16日／1416年5月14日に亡くなっている。al-ʻAynī, *ʻIqd al-Jumān*, 1: 80.

18）マフムードの2歳年下の弟でイブン・アイニーの大叔父にあたるアフマドについては，没年は明らかになっておらず，またその息子カースィムは1411年に亡くなっている。拙稿「マムルーク朝期の非著名知識人のライフコース：アフマド・アイニーに関する事例研究」『東洋史研究』70：4（2012），pp. 46-46.

19）バドリーヤ学院については，拙稿「職業的キャリア」238-239参照。

20）ワクフ設定者が自身の家族や子孫を受益対象として設定するワクフを「家族ワクフ」と呼ぶ。五十嵐大介『中世イスラーム国家の財政と寄進：後期マムルーク朝の研究』刀水書房，2011年，pp. 168-187。

21）Ibn Taghrībirdī, *al-Manhal al-ṣāfī wa-l-mustawfá baʻda al-wāfī,* Cairo, 1984-2009, 11: 196; al-Sakhāwī, *al-Ḍawʼ al-lāmiʻ,* 10: 133.

22）Al-Ḥanafī, *Nayl al-amal,* 6: 238.

23）Takao Ito, "Aufsicht und Verwaltung der Stiftungen im mamlukischen Ägypten," *Der Islam* 80 (2003), p. 64.

24）拙稿「学問的キャリア」pp. 61-62, 68-69.
25）祖父のマフムード・アイニーも，５歳からクルアーンの暗唱を始めたと書き残している。拙稿「学問的キャリア」pp. 62, 68-69.
26）Al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-lāmi'*, 1: 345.
27）Al-Ḥanafī, *Nayl al-amal,* 6: 147. アブラク・ジャカミーについては，Ibn Taghrībirdī, *al-Manhal al-Ṣāfī,* 1: 198; Al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-lāmi'*, 1: 190.
28）拙稿「職業的キャリア」p. 245.
29）拙稿「非著名知識人」pp. 52-53.
30）Al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-lāmi'*, 12: 68-69; Al-Ḥanafī, *Nayl al-amal,* 6: 233.
31）Ahmad Abd al-Rāziq, *La femme au temps du mamelouks*
32）Kristof D'hulster and Jo van Steenbergen, "Family Matters: The "Family-In-Law Impulse" in Mamluk Marriage Policy," *Annales islamologiques* 47 (2013), 61-82.
33）なお D'hulster and Steenbergen, "Family Matters," pp. 69-71 は，ザーヒル・ジャクマクの妻 Zaynab bt. Jarbāsh なる女がこのシュクルバーイの孫であるとし，ジャクマクの後にスルターンとなったフシュカダムはシュクルバーイと結婚することでジャクマクとの姻戚関係を有していたことを指摘している。確かに，Zaynab の母である Fāṭimah bt. Qānībāy の伝記記事（Al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-lāmi'*, 12: 98-99）はその母を Shukrbāy al-Jārkasiyyah とするが，彼女がはじめバルクークの妹の子である有力アミールの Qānībāy al-Umarī（d. 810/1407）の女奴隷であり，彼の死後別のアミール Qaṣrūh al-Ẓāhirī（d. 839/1435）と結婚していることを伝えている。この情報を，上に見たイブン・アイニーの祖母シュクルバーイの伝記記事と比べるならば，彼女は元来スルターン・ファラジュの女奴隷であったとされている点，Qānībāy や Qaṣrūh との婚姻についての記述がない点等の相違があり，同名の別人である可能性が捨てきれない。
34）Al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-lāmi'*, 12: 68.
35）Petry, *Protectors or Praetorians?*, p. 169.
36）イスラーム諸王朝の社会において，ウラマーと官僚とを明確に区分することは難しいが，少なくともマムルーク朝時代の行政機構においては，武人たる「剣の人」と文人たる「筆の人」の職掌に２分した上で，「筆の人」の中でクルアーンに基づくシャリーア的・伝承的学を修めた者が就くべき「ディーン（宗教）的な職」と，財務や文書行政に関わる「ディーワーン（帳簿，官庁）的な職」とは区別されていた。拙稿「中世イスラーム政権（1）：政教関係とウラマーの知」『イスラームは特殊か：西アジアの宗教と政治の系譜』柴田大輔・中町信孝編著，勁草書房，2018年，pp. 224-229 参照。
37）Muḥammad Muḥammad Amīn ed., "Wathā'iq waqf al-sulṭān al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn," in Ibn Ḥabīb, *Tadhkirat al-nabīh fī ayyām al-Manṣūr wa-banī-hi,* Cairo, 1982, 2: 417.
38）五十嵐『中世イスラーム国家』p. 197 によれば，スィルヤークース修道場の監督官（管財人）ポストはその後，武官である官房長（dawādār kabīr）に与えられるようになったという。同書 pp. 198-199 表15参照。
39）古来，規則的に氾濫するナイル川の水利に依存するエジプト社会では，西暦の７-８月にナイル川の水が「満水」に達する時期に運河開きを中心とする「ナイル満水祭礼」が行われてきたが，マムルーク朝後期にはその祭礼の執行はもっぱらスルターンの年長の息子が担っていた。石黒大岳「ブルジー・マムルーク朝時代におけるナイル満水祭礼の執行者たち：マカームの登場とその背景に関して」『オリエント』45：1（2002）参照。
40）Ibn Iyās, *Badā'i' al-zuhūr*, 2: 421, 423, 425, 428, 443, 445, 452, 454, 458, 473. マムルーク朝においてスルターンの実子に対して用いられる称号については，石黒「ナイル満水祭礼」p. 135 参照。
41）U. Haarmann, "Arabic in speech, Turkish in lineage: Mamluks and their sons in the intellectual life of fourteenth-century Egypt and Syria," *Journal of Semitic Studies* 33: 1 (1988).

【付記】
本稿は，科学研究費補助金・基盤研究（B）「13-15世紀におけるアラビア語文化圏再編の文献学的研究」（研究代表者：佐藤健太郎，課題番号 18H00719-01）の成果の一部である。